令和５年度が始まりました。この３年間はコロナ禍で沈んでいたような社会も明るさや躍動感が戻ってきているように感じます。いよいよ新型コロナ感染症が５類になります。そして、本県でも県庁４階講堂に設置されていた沖縄県新型コロナ感染症対策本部総括情報部（通称：県コロ）も解散となります。常勤非常勤含めてコロナ対応に尽力してきた県コロスタッフは、元の状態になった講堂を見たときに何を思うのでしょうか。さて、５類になってもいくつかの機能は残して県の各々の部署に引き継がれる予定です。一部の公費負担も継続されます。しかし、新型コロナ感染症は特別な医療機関が診療するものではなく、季節性インフルエンザ同様に日常診療でかかりつけ医が診るものとなります。一方、国や有識者、メディアなどの一部では「コロナ前に戻る」というような表現が見受けられ、国民もそのように考えているのではないでしょうか。しかし、５類になったところでウイルスは変わりません。コロナ前の社会に戻るのではなく、アフターコロナ社会としてどの様にしていくのか、前向きに考えることが求められていると思います。

東日本大震災から12年となりました。この原稿を書く前の３月10日に岩手県上閉伊郡大槌町を訪れてきました。震災において、本会からは大槌町に３月16日から79日間にわたり79名が医療支援に入りました。その報告は別の機会にさせて頂きたいと思いますが、復興はまだまだの状態です。我々には災害の経験から得た教訓を活かし、知見を用いて課題を解決し、今後に備えることが求められています。政府の地震調査委員会は、南海トラフ地震の向こう30年間の発生予測を60%程度に引き上げました。さらに、東側の震源域と、西側の震源域がそれぞれ別々に、しかも時間を空けてずれ動く「半割れ」と呼ばれるケースも想定されています。このケースでは、地震や津波で大きな被害が出ている地域の救出や支援、復旧活動をしている間に、被害が出ていなかった別の地域で地震が発生します。「半割れ」が起こると、復旧活動の途中で激しい揺れや大津波に襲われる危険性があり、また、支援側となる県も自県の被災に備えるため、支援に入れない状況となり、被災地に救助や医療支援の手が十分行き届かなくなります。このようなケースも考えておかなければなりません。また、本年２月にトルコで大地震が発生しました。会員の皆様も医師会による支援金にご協力されたことと思います。今後は災害関連死の発生･増加が想定されますが、それを防ぐために他に何かできる事はないかと考える日々です。

新年度を迎える４月号は、リュウキュウムラサキの表紙です。昨年の本誌緑陰随筆で紹介されており、一読された方もおられることと思います。さて、蝶をモチーフとした多くのコレクションを世界に送り出してきたのがデザイナー森英恵さんです。ニューヨークで観劇したオペラ「マダム・バタフライ」を鑑賞したときに、描かれていた哀れでかよわい女性像や日本文化が誤って認識されている事などに憤慨し、日本の女性には、蝶々のように世界にはばたいて欲しいとの思いも込めて、蝶を描き続けてきたそうです。令和５年度は蝶のようにはばたく年になる事を願っています。今月号もページを捲ると重要な報告や興味深い話題ばかりです。ぜひご一読下さい。

令和５年度からは、コロナ禍等のために年６回の隔月発行となっていた本誌も年12回の毎月発行に復活します。会員の皆様にもご協力を頂き、今まで以上に重要な情報源となるようにして行きたいと思います。会員の皆様からの随筆や写真などをお待ちしています。

広報委員　出口　宝